

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【十二】

後堂 門 原 信 典

方回の序② 大慧禪師は大事な碧巖録を焼き捨てました。

【是に於て、禪宗の頌古世に行わるる有り。】

インドでは紀元前千二百年頃に自然の神々への讃嘆を口伝で伝えていく為に、アーリア民族の間に一種の韻文体が残されています。

後に当時の正統的バラモン教の教えを根本聖典にまとめて記録されたのがベーダです。ベータとは宗教的智識という意味で四種類あるそうですが、有名なのはリグ・ベータ「神々の賛歌」と云われます。

佛教も同様に、お釈迦様の教えである経典を多くの偈文で伝える形が取られていました。そして玄奘三蔵や鳩摩羅什

三蔵などの多くの三蔵法師によつて中国語に翻訳され、改めて中国語の音律に合わせて出来たものが十二分経の中の「偈」の部分です。

やがて佛教が中国に定着し、僧侶も自らの境地を偈文で表現するようになります。

禅宗史上では鑑智僧璨禪師の「信心銘」が最初と云われています。

そして唐代に於いて知識人たちの関心が禪に向けられるようになり、偈が純粋な文学的な詩の形と成ります。寒山、或いは禅月大師は詩文の中に禪の教え仏様の徳を表現されます。それを偈頌とも云います。

禅月大師は七歳で得度されますが、其の直後から天性の詩人である事に万人が讃嘆しま

す。その詩は、寒山詩と共に中国では盛んに用いられ、雪竇禪師はこの禅月大師の影響を受けました。

そして頌古の古は古則の古です。

高僧といわれる方たちの生涯の教説や語句、機縁(師匠と弟子とのめぐり合い)を古則と云い、碧巖録、従容録では本則にあたります。この本則に対して頌の形で自己の修行の観点から表現されたものを頌古といえます。

【其の徒に翻案の法有り。】

翻案は判決を覆す。広く一般的に正しい事、常識と云う事や、分別心をひっくり返して、凝り固まった自我の思いを木っ端微塵にしてしまいます。

【佛を呵り祖を罵り。】

佛様を呵り、祖師を罵る。私たちがから見れば、こんなことは想像も出来ない事です。

佛祖の道に徹底され、佛祖と一つだからできるのです。それは佛道に対する親切心です。

【為さざる所無し。】

出来ない事は無いということですが、自由自在に何とでも表現されます。私たちは何かに執着し、物事を決めつけていないと生きて行けません。その思いをも潰されてしまいます。そう

いう事をわきまえておかないと、此の碧巖録は読めないぞ。という事です。

【聞ま深く吾が詩家の活法を得る者有り。】

ですから雪竇禪師、圓悟禪師のように詩偈を用いて変幻自在に深く佛法を説く祖師が出現されるのです。

【然れども所謂第一義は、焉んぞ言句を用いん。】

しかし、この佛法の第一義をどうやって言葉を用いて表現する事が出来るのでしょうか。こんな事は出来ない、不可能な事、そう思うのも私たちの浅はかな理解です。

【雪竇・圓悟、老婆心切なり。】

そんな私たちの為に雪竇禪師も圓悟禪師もあらゆる言葉を駆使して示されているのだから老婆心にあふれているのです。

【大慧已に一炬もて之を丙けり。】

しかし、大慧宋杲禪師は、その刊行されている碧巖録、そして版本まで可能な限り探し集め、法炬で焼き払いました。それは大慧禪師も、ただひたすら佛道修行の実践を願う大慈悲心に満ちた老婆心を持たれていたのです。

【岷中の張煒(字は)明遠、死灰を燃して復た板行するは、亦た

所謂老婆心切なる者か。】

岷中は、呉と楚の間にある封岷山に因む地名です。

死灰を燃やすというのは、停止していたものが再び活動を始める事です。死灰は「火が燃え尽きて残った灰」そこから「生きる気力の無い」例えとなります。

死灰復然(死灰また然ゆ)という熟語があります。

実はこの「然」が、この燃えるという字の元で、火の気の無くなった灰が再び燃え始める。という意味です。

「死灰」にはもう一つ意味があります。「天地同根万物一体」の出典とも言われる莊子の齊物論の中に「心は死灰の若し」(俗念を忘れ去った無我の境地の形容)とありますが、ここでは、大慧禪師様が燃やした碧巖録を甦らせたという事です。それは同時に雪竇禪師、圓悟禪師の老婆心が再び甦る事。この明遠も老婆心にあふれているのです。

大徳四年庚子(一二三〇年)四月初八日癸丑、紫陽山の方回(字は)万里序す。
安徽省歙県。端溪と並び称される硯の産地だそうです。

(続く)

テレホン法話 〇八九七 四一〇〇三三

禅のたより



◆縁をつなぐ

新型コロナウイルスが蔓延してから、月によつては毎週のように、日曜坐禅に新しい人が来るようになりましたが、なかなか続かないようです。

不謹慎なことですが、私はそういう人が来るたびに、同じ坐禅作法を説明するのが、だんだん面倒になりました。

そこで、問い合わせの電話を受けたときに「二度坐ったぐらいでは足が痛いばかりで、それつきりになります。せめてひと月ぐらい、まあ四〜五回は続けるぐらいの覚悟でお出で下さいね。」と付け加えるようにしました。

すると、「毎週は無理なので、少し暇になったら」と尻込みをして、電話を切る人が増えました。内心「やれやれ」といった気分でしたが、ずっと罪悪感といひますか、後ろめたさを感じていました。

新居浜市の瑞應寺での修行時代、檀崎通元老師にお諭し頂いた次のようなお話があります。

お釈迦さまが、祇園精舎にやつて来た酔っぱらいの願いを

受入れ、出家、つまりお坊さんになることを許可し、髪を剃り、法衣をまとわせました。ところが、あくる日になって酔いが覚めた男は逃げてしまいます。なぜ酔っ払いを出家させたのか訪ねる弟子たちに「いま、ここで形だけでも出家させておくと、いつかそれが「縁」となつて本当のお坊さんになろう、と思う日がきつとくる。良い種をまいておくことが大切だ。」とおっしゃったそうです。

この話は、大智度論というお経や、永平寺を開かれた道元禪師さまの正法眼蔵(出家功德の巻)にも出てきます。

この話をされながら、檀崎老師は「縁あつて頭を剃り、お袈裟を掛け、僧堂(修行道場)で寝起きをさせてもらっている。それは、たとえ嫌々でも、本当に有り難く大切なことだ。だからしっかり勤めなさい。」と諭し励ましてくださったことがあります。

昨年の秋、瑞應寺へお伺いした折に、老師のお部屋にお邪魔して、「香川の南隆寺です」と申し上げると、「おうおう、清磨(せいま)さんか」と、四十年前に亡くなった

私の父の名前を呼びました。私の名前ではなく、父の名前を呼んでくださったことを、なぜか私は少しうれしく思いました。

そのあとで、通元老師は「二枚書いて差し上げたら?」と、ヘルパーさんに促され、丁寧に十分ほどもかけて短冊を一枚書いてくださいました。

そこにはこう書かれていました。「損か得か人間の尺(はかり)。その短冊を頂戴した私が「これは?」と老師のお顔をのぞき込むと「さあ」と仰つてにこにこされていました。

しかし、坐禅会のことがかにかかつていた私は、ハツとしました。目の前の通元老師と四十年前に亡くなった父に「今のお前じゃ!」と言われたような気がしたのです。

今年七月、九十七歳でご遷化された檀崎通元老師が私にくださったご遺言のように思っています。

私は、「お坊さんであるにもかかわらず、私の方から大切な縁を断ち切つていた」と大いに反省しています。何をすることも「損か得か人間の尺(はかり)」と口の中で唱えながら、坐禅作法の説明も懇切丁寧にさせて頂いております。

坐禅をしてみようと思う、お経に興味を持つ、お寺やお墓の

お参りをしようと思う…などなど、たとえ三日坊主でも結構なのです。先ず一步を踏み出して、「縁」をつないでおくことが大切なのです。皆さんも新しい年に向け、今第一歩を踏み出してみては如何ですか。

香川県南隆寺 大石光昭師
令和四年十二月十一日〜二十日

◆信仰が導く救い

五十歳を前にして亡くなったお母さんの十三回忌のご法事のあとで、その娘さんが車でお寺まで送ってくださいました。お寺に着いて車から降りようとすると、娘さんがまだ何か話したそうでしたので「ああ、そうそうお父さんがご寄付くださった仏具をご覧になりますか」と本堂に招き入れました。

本堂に上がったとき、その仏具に記してあったお母さんのご戒名と、お父さんのお名前を見たとき、娘さんの表情が少し変わりました。しばらくの間、じつと見つめていた顔をこちらに向けて「和尚さん、不思議な話ですが、父は亡くなった母に救われました」と、少し目に涙をためて言いました。

「母の病気が分つたとき、母のことはもちろんですが、一人になる父が心配で心配でなりませんでした。父は何しろわがままで、仕事以外は何一つできないような人で

した。ところが、母が亡くなつてから、本当によくやってくれています。てつきり飲んだくれになると思つていたのに、全く変わりました。そんな父が、最近こう言うんです。『前は死んだかあさんが耳元で、ああしなよ。それはいいかげつて囁いてくれているような気がしてたが、今はわしが思いよんか、かあさんが言いよんか、ようわからん。なんやら…かあさんとひとつになつとるような気がするんや』つて。これ、父は母に救われてるんですよね? 私が「そうですわ」と頷くと、娘さんもただただうんうんと頷いていました。

娘さんが帰つたあと、私はいろいろと思いを巡らせました。きつとお父さんは、最初は「かあさんや…」。こんな時、どうすればええんかなあ? 「かあさんならどうするやるか? そうや、かあさんならこうするに違いない」「こんなことしてたら、かあさんが心配するわ」と、寝ても覚めても、何をしても「かあさんなら…かあさんなら…」と、亡き奥さまに問いかけ、亡き奥さまの思いや願いを推し量りながら暮らしていたのでしょうか。

でも、そうやって、毎日毎日お仏前に坐り、手を合わせる年月を重ねる間に、いつしか、亡き奥さまとの対話ではなく、「仏さまならきつとこうするだろう。仏さま

ならこんなことはしようはずがない。仏さまならこんな風にはおっしゃらない」というふうに、自分の心や行ないを仏さまと重ね合わせるようになり、やがて、「私という仏が寝起きして、食事をして、喜んだり嘆いたりしている」と気付かされ、何一つ疎かにすることは出来なくなったのだと思に至りました。それこそ、丁寧に丁寧に、毎日を生きるようになられたのだと思うのです。

受け難き人身を受けてこの世に生まれ、奥さまに先立たれることで遇い難き仏法に値い、このような縁にめぐり会えた。奥さまの供養を通して、ほんの一時も途切れることなく、自分を見極めてこられたのだと思います。

この一年、安閑と過ごされた方もそうでない方も、来たる年は『亡くなった父なら、母なら、尊敬するあなたなら、愛しい人なら：仏さまなら』という思いで、ひと言ひと言、一步一步、一日一日を丁寧に積み重ねる生活を心がけてみては如何でしょうか。

香川県南隆寺 大石光昭師

令和四年十二月二十一日～三十一日

◆旅はまだ終わらない

新しい年を迎えました。

昨年新型コロナウイルスは衰えることなく感染が広がり、更

にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、世界中の多くの人が平和を願っているのに終わりが見えません。また日本でも理不尽な事件事故が後を絶ちませんでいた。一体私たちは何処に向かっているのか？云い知れぬ不安に包まれた一年でもありました。

瑞應寺では前住職崎崎通元老師がご遷化されました。

通元老師の思い出を修行の友と語れば尽きる事はありません。

お釈迦様の十大弟子のお一人阿難尊者は、お釈迦様の教えを最も多く聞かれました。その記憶に基づいて教えを記録し、経典が編纂されます。その冒頭の「如是我聞」という一句は、「是くの如く我きけり」（私はお釈迦様からこのように聞きました）という意味ですが、この「我」とは多くが阿難尊者の事です。

通元老師に出会われた方はみな等しく、この阿難尊者の如く「私は通元老師からこのように聞きました」と語られます。それほどに老師のお言葉は人々の心に深く残るのです。

残るだけではなく行き先を示し、また同時に導いてくださっているのです。

皆さんもご存じと思いますが、NHKのプロジェクトX―挑戦者たち―という番組のエンディングで中島みゆき氏の「ヘッドライト・テールライト」という曲が流れます。ヘッドライトは未来を、テールライトは過去を表現されていると思うのですが、過去と未来を生きているのは「今」です。

「い・ま」と言いますが、「ま」と言ったら「い」はもうすでに過ぎ去っています。

過去は「今」を創り続け、「今」は未来を創り続けています。

「今」しかない。今を大切に」と言われますが、「今、この私」は過去も未来も含んでいるのです。

老師はお亡くなりになっても、私たちの行く先を照らしてくださるヘッドライトであり。私たちを導いてくださるテールライトでもあります。朝のご挨拶で「佛道は人人の脚根下にあり」と常にお話でした。

脚根下とは足元の事、足元とは常に生き続けている「今、この私」どこに向かっているのか？と探すのではない、与えられた「今、この私」が佛道を、坐禅を行うだけのです。

曲は続きます。「ヘッドライト・テールライト 旅はまだ終わらない」

瑞應寺専門僧堂後堂 門原信典 合掌

令和五年一月一日～十日

新春書初め

海日陰す影

溪研便是廣七

山色豈能清淨

德不銷水

古松

結采自然成

慧岳堂



■三朝大般若祈禱

正月一日より三日間、朝課時法堂にて大般若転読祈禱を厳修。須弥壇に供えられた般若札は三日間の祈禱の後、当山檀信徒各家に配られる。

■文化財防火デーに伴う火災防御訓練

一月十八日(水)、文化財防火デーに伴う火災防御訓練を新居浜南消防署、上部地区消防団、角野分団の協力・指導のもと実施した。山内一同、総代会様、ひかり幼稚園も参加し、消火器の取り扱い方法など学んだ。



訓練の様子

■首座法戦式

今冬首座、大菅康稔士の法戦式が一月二十三日(月)に修行された。「永平頌古 身心脱落」に就いて法問を戦わせた。当日は、僧堂諸役寮師、梅花講、和敬会等随喜した。



首座法戦式

■寒修行托鉢

恒例の寒修行托鉢が一月十九日(木)より三十日(月)まで修行され、山内大衆、役寮諸師共に、上部地区を中心として新居浜市内を浄行乞食。浄財施者十方檀那に深謝。



寒修行托鉢



一月の日鑑

- 一日 大般若祝禱諷經
- 二日 歲朝人事・年賀ノ拜
- 三日 角野消防団初祈禱
- 四日 寿餅ノ拜
- 五日 年頭総代会
- 六日 おねはん受付開始
- 七日 日曜参禅会
- 八日 祝禱・略布薩
- 九日 觀音講・勉強会
- 十日 文化財防火デーに伴う火災防御訓練
- 十一日 寒修行托鉢(廿日迄)
- 十二日 法戦式
- 十三日 金毘羅初大祭(旧一月十日)
- 十四日 略布薩

二月の予定

- 一日 祝禱
- 二日 涅槃摂心(十日迄)
- 三日 土地堂念誦
- 四日 祝禱・小参・人事行礼
- 五日 涅槃会・略布薩
- 六日 觀音講・勉強会
- 七日 略布薩

銀杏感謝録

大阪府	顯孝庵 殿
岡山県	源樹寺 殿
愛媛県	法華寺 殿
秋田県	満友寺 殿
山形県	耕圓寺 殿
鳥取県	普音寺 殿
愛媛県	安樂寺 殿
静岡県	慶雲寺 殿
静岡県	養源院 殿
島根県	常喜寺 殿
高知県	觀喜寺 殿
大阪府	東仙寺 殿
北海道	大玄寺 殿
宮崎県	願成寺 殿
長崎県	洪徳寺 殿
高知県	高間寺 殿
北海道	總泉寺 殿

(令和四年十一月十八日受付迄)



鐘 声

新年を迎えた。今年は自分をどう変えられるのか…。まだ多くの課題が残されている。自分自身の中から変わっていければいいのだが、目標を見失わない様に安心していきたい。

今冬首座